
宝星学園

椎名美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝星学園

【Nコード】

N1831F

【作者名】

椎名美里

【あらすじ】

ちよつと天然な南奈緒は、私立の宝星学園を受験した。しかし、どうも険しい顔の担任。「嘘っ・・・。」奈緒が受験したのはなんと男子校だった！！これから奈緒は全寮制の男子校で目立たず楽しい学校生活をおくれるのだろうか！？

プロローグ

今日は、南奈緒みなみ なおが受験した私立高校の合格発表の日。

奈緒はある教室の前で立ち止まる。

ふう。

自分を落ち着かせるように深呼吸をして、合格通知を持って持っているはずの荒井先生のいる教室のドアを開けた。

ガラ

「し、失礼します。」

奈緒は恐くて荒井の顔をうかがうことなく、用意されていたイスに腰掛ける。

合格している事を一心に祈り、奈緒は一呼吸置いて荒井を見る。

しかし、荒井はなにやら険しい顔をしている。

もしかして……。

奈緒の心の中で『不合格』という言葉がふとよぎる。

すると、荒井が口を開いた。

「……お前。宝星学園ほうせいがどんなものか、知ってて受験したのか？」

荒井は、あきれたような口調で奈緒の顔をじっと見て言った。

「え……。」

奈緒は、荒井の言葉をマイナス方向に解釈した。

『宝星学園の学力レベルを知っていて受験したのか。』

そう言っているように思えた。

……不合格だ。

奈緒は愕然とした。

宝星学園はこの地域でも有名な進学私立高校だった。

もちろん、奈緒もそれは重々承知していた。

だが、奈緒も成績はそこそこだった。

現在在席するこの中学でも、学年で1、2を争う。

もちろん受験勉強は人並み以上にしていたし、模試の結果もA判定だった。

「……。」

奈緒は黙りこくる。

まだそうと決まったわけではないのに、涙が出そうだった。

荒井の顔を見ることもできない奈緒は、うつむいて、荒井からかかる次の言葉をじっと待った。

しかし、その言葉は、奈緒の予想を遙かに超えたものだった。

「………ここ、男子校だぞ？」

「!？」

奈緒は思わず目を見開いた。

それが余りにも衝撃の事実だったからだ。

男子校？

奈緒が受験した宝星学園は男子校だったのだ。

それは奈緒が男だったら問題は無かったのだが・・・奈緒は女だった。

「・・・おまえ、女だろう。」

「もっ、もちろんです！・・・そんなあ・・・。」

不合格だと思い、ためていた涙があふれてきた。

ばか。

ばかばかばか！

どうして、気がつかなかったの？

わたしのばか！！

奈緒は、学校の設備、主な進路先、部活動、学食のメニューまで調べていたが、そこが男子校であるとは気がついていなかった。

「で、では……！わたしは……。」

『不合格』？

せっかく受験勉強をここまで頑張ったのに。

宝星高校一本で受験したのに。

なぜだか中学3年間の思い出が走馬燈のように奈緒の頭の中で駆けめぐった。

「……普通は入学できんな。」

「ふ、つう……は……？」

荒井の言葉が引っかかる。

「先生達もな、どうにかしてお前を高校に入れてやりたくてな。」

「……。」

奈緒は荒井の言いたいことが、よくわからなかった。

「……南。合格、おめでとう。」

その時、今日初めて荒井は笑顔を見せた。

「えっ!?!?・・・ご、合格ですか!?!?」

合格、不合格どころか、入試対象にもなっていなかったはずだったのだが、荒井は確かに合格と言った。

奈緒としてはもちろん嬉しかった。

・・・が、男子校という事実はまだ残っている。

手放しでは喜べないのも正直なところだ。

「先方も、まさか女子だとは思っていなかったらしくてな・・・。

先生がお前が女子生徒であると持ちかけるまで気がついていなかったようだ。」

「で、では・・・?」

気がついた今はどうなのか?

女子だとわかった今は?

「宝星とも話し合った結果、『入学許可』だそうだ。」

「ほ、ほんとですか!?!?・・・で、でも、男子校・・・。」

男子校に女子生徒が入学するなど、少女漫画でしか聞いたことのない

い話だった。

「まあ、1年したら、別の高校の編入試験を受けるという条件だ。

空白期間があると、後々の大学入試に響くからな。」

「あ、ありがとうございます!!」

奈緒は力一杯頭を下げて、荒井に感謝した。

男子校……。

それでも、宝星学園に行けるんだ!

……あの家から出られるんだ!!

「……これは知っていると思うが、……全寮制だ。」

「はい。……そのためにココを受けたんです。」

「気をつけるよ。とにかく。目立たず、平凡に生きてゆけ。」

「う……、が、頑張ります。」

プロローグ（後書き）

少女漫画の王道設定『男子校』。
基本的にコメディなので、楽しんでいただければ幸いです。

1話：入学式 1

4月某日。

世間一般の高等学校入学式の日。

もちろん奈緒も、入学式に臨む。

・・・男子の制服で。

木を隠すなら森！！！目立たないように・・・。

奈緒は宝星学園のブレザーに身を包み、お城の門のような壮大な校門をくぐる。

数日前に少し切ったセミショートのくせのある髪に、黒ぶちメガネを装着。

男物の制服は奈緒の150cm弱の体には大きく、まるで借り物状態。

「おい、あれ見ろよ。」

「うおっ！まじ可愛くね？」

うつむいて駆け出そうとした瞬間。

「やあ、彼女っ！」

「きゃ！？」

いきなり目の前に現れた男子二人組。

驚いて女らしい悲鳴を漏らす奈緒。

だ、誰え〜？

しかも女ってバレバレ〜！！？

「お！やっぱり女だ。」

「まだわかんねーって。声変わりしてないだけかもしんねーし。」

「……。」

奈緒を観察するようにジロジロと見て話す二人。

か、かつこいいなあ……。

二人とも。

最初に奈緒に声を掛けてきた男子は、奈緒より少し短いくらいの髪で、いかにもジャーズ系。

もう一方は茶髪で、ピアスをし、少し怖い印象を受ける。顔は良いが。

「んで、どっち？女の子？それともおかまちゃん？」

ジャーズ系男子が、単刀直入に尋ねる。

どうしようあー！！

「なあ、どっち？」

茶髪男子も迫るように奈緒に聞いてくる。

きゃあー！！

奈緒が辺りを見回すと、にやにやと笑ったり、目をこらして様子をつかがったりするギャラリーがびっしりだった。

絶対目立ってるうー。

「あ、あの！……め、目立たない所で話したいなあ……なんて

2話：入学式 2

二人の美男子に迫られて（？）目立たない場所まで移動させられることになった奈緒。

ジャーズ系男子にお姫様だっこされたまま、ちらほら人がいる廊下に行く。

恥ずかしさのあまり、奈緒の顔は真っ赤だ。

「はい。着いた。」

ジャーズ系男子が優しく奈緒を床におろした。

「こ、ここわ・・・!？」

「ん、視聴覚室かな。」

のん気にジャーズ系男子は微笑む。

「さて。」

茶髪男子が待ちきれないと言った様子で奈緒に近づく。

「わざわざ来たんだから、早速言ってもらおうか。」

茶髪男子は奈緒をにらみつけるような眼差しで見た。

しかし、その瞳はなぜか希望の光を帯びていた。

奈緒は茶髪男子に迫られて、じりじりと後ずさり。

「な、何を……？……っわ!？」

足下がもつれ、尻餅をつく奈緒。

奈緒の目線に合わせるように自分もしゃがむ茶髪男子。

「女かっつてことにきまっつてんだろ。」

追求を続ける。

「えっ、とお……。」

ど、どどうすれば!？」

言っても……いいんだよね？」

入学許可されたんだもん、ね……？」

バレちゃっても平気だよね……？」

「「「……。」」」

期待をのぞかせるキラキラした瞳で見つめる二人。

せいのっ！

「女ですッ!!」

奈緒は目をつむって言った。

「「よっじゃ!」」

少年二人はハイタッチをかわす。

パンツ

静かな視聴覚室にかわいた音が響く。

????

「よくやった、女。」

茶髪男子が奈緒の頭をクシャっとなでる。

「は、はい?」

いまだ、なぜ自分が女であることでそこまで喜ばれるのかわからない奈緒。

「いや、良かったよ。ホントに。」

奈緒の手を握り、満面の笑みのジャーンズ系男子。

「な、何が……？」

全く意味がわからない奈緒は目の前にいるジャーンズ系男子に尋ねる。

「お前がいてくれて！」

「!?!」

茶髪男子がいきなり奈緒の肩を掴んで笑顔を見せる。

うわ……。

やっぱり格好いいなあ//

「女の」、いなくて困ってたんだよね！」

ジャーンズ系男子がニカッとまぶしい笑顔。

・・・この人も・・・格好いいな／／／

「てこととで。」

二人が顔を見合わせてニツと笑って・・・

「彼女になってよ!」「彼女になれ!」

「ええ!!!??」

衝撃の告白。

出会うて間もない、名前もまだ知らないイケメン男子二人に同時に告白された奈緒。

冗談でしょお〜〜!!??

「あ、名前おしえて!」

すでにOKされたも同然のように名前を聞くジャーズ系男子。

「ちょ、ちょっと。」

奈緒は反論しようとするが・・・

「早く言えー!」

すかさず茶髪男子が命令口調で、しかし楽しそうに言う。

「・・・み、南奈緒。です。」

「奈緒ちゃんねえ。おれ水野優司みずの ゆうじ。よろしく!」

「俺は森明良もり あきら。頼むぜえ。奈緒!」

「よ、よろしく・・・。」

一体、何が起こったのでしょうか・・・!?

ピンポンパンポーン

『新入生のみなさんは講堂に移動してください。』

集合を知らせる放送が流れた。

「ほら、立った。」

明良が奈緒の手をとって立たせる。

「あ、ありがとう・・・。」

少し照れる奈緒。

「じゃあ、いきますか!」

奈緒のもう一方の手をとって、前を見つめて元気に叫ぶ優司。

これからわたし、どうなっちゃうのお〜!?

今回も心の中で奈緒は叫ぶのであった。

3話：入学式 3

イケメン男子、明良と優司に同時にお付き合いを申し込まれた奈緒。そして勝手に付き合うことにされたのであった。

入学式を終えた一行は、クラス発表の掲示板をながめる。

「お、俺等同じクラスだぜ。これはラッキーだな。」

含みのある顔でニヤリと笑う明良。

「ほんとだぁ……。」

A組と書かれた欄には、3人の名前があった。

「でもさ、クラス分けて入試成績順だからさっ。運ラッキーがいいって違うじゃん？」

明良のセリフが妙に引っかかる優司。

「ばあか。ラッキーなのは単にクラスが同じって事じゃねえ。水野、南、森。出席番号も連チャンじゃねーか？」

言葉は疑問系だが、確信を持ったニュアンスで問う。

「あっ！……ホントだ。25、26、27って！」

奈緒は名簿を指さして出席番号を読み上げる。

「おおっ！明良さっすが〜！」

明良の機転の良さに感心する2人。

「行くぞ。」

そんな2人に誇る様子もなく、先頭を切る明良。

ガラッ

1年A組と書かれた教室に入る3人。

ザワザワザワ

もちろん注目の的。

「う、どうしよ……。目立ってる……。？」

明良と優司の後ろに隠れるように縮こまって動揺する奈緒。

「だろーな。」

淡々と答える明良。

「俺が格好いいからかな！やっぱ。」

悪びれた様子もなく、素で言う優司。

「ちがうだろ。」

すかさず明良がつっこむ。

二人のやりとりを見て思わず笑いが漏れた奈緒。

どうやら優司がボケ担当で、明良がツッコミ担当のようだ。

そんなこんなでなんとか落ち着きを取り戻した奈緒をみて、二人は顔を見合わせて席に足を進めた。

席は偶然にも長机に3人がけ。

出席番号順に3人は奈緒を囲んで同じ机に座った。

その瞬間。

ガラガラッ

黒板側の扉が開き、教師が入室した。

「よし。そろつたな！担任の杉原だ。よろしく。」

簡単な説明があった後、チャイムが鳴り、本日のHRは終了。
ホームルーム

号令と同時に、奈緒達の前の席の3人が振り返った。

「なあなあ！お前つてやつぱ女!？」

「ひえっ!？」

奈緒の目の前の席に座っていた、『元気が取り柄です!』みたいな男子がいきなり核心を突いて奈緒に聞いてきた。

「僕も気になるんだけど！それともソツチ系？」

優司の前の小学生みたいな童顔少年も笑顔ですごいことを聞いてきた。

「二人とも!?!いきなり失礼ですよ!！」

明良の前のメガネ男子が慌ててフォローに入る。

奈緒は一瞬驚いたものの、3人の問いかけに答えようと口を開いた。

「あ、あの・・・実は・・・。」

「ソツチ系だ。」

「!?!?明良く・・・んぐっ!?!？」

奈緒は真実をしゃべろうとしたが、明良がそれに口を挟んで、奈緒の口を塞ぐ。

「そーなの。彼、ソッチ系なんだって。」

それに便乗して笑顔で答える優司。

「んんっー!?!」

抗議の声を上げようとする奈緒だが、明良の手のひらがそれをゆるさない。

「おお〜!」

「それはそれは……。」

「男が好きなのか!?!」

そして明良と優司の発言を信じる3人。

そんなあ〜。

『彼』? 『ソッチ系』?

そんなのってないよあ〜。

もう、泣きそお……。

明良に口を押さえられて、思うように息ができない苦しみと、誤解

されていることに泣きそうな奈緒。

「はいはい。そういった興味本位な質問はご遠慮ください。彼はガラスの少年（？）だからっ。」

優司はアイドルのようにウインクをバッチリきめて言う。

「みてる。こいつ、もう泣きそうだぜ?」

明良はニヤリと笑いながら言う。

「んんっ……!!」

誰のせいだとお……!!

目に涙を浮かべる奈緒を見て、すまなさそうにする3人。

「あ、わりいな。えっと……。」

「ナオ。南奈緒。だそうだ。」

勝手に自己（？）紹介する明良。

「ナオか。よろしくな。俺^{たくち}田^{そうた}口^{そうた}颯^{そうた}太^{そうた}!」

ハキハキと言う元気少年。

「僕は坪内涼真。」

ニコニコと笑みを絶やさず言う童顔少年。

「自分は殿垣内政喜です。」

紳士的に言うメガネ男子。

「……っは……。……よ、よろしく……。」

明良にやっと開放されて、何とかきこちなく微笑む奈緒。

「!? すっげーな。マジで女みたいだな！ ナオ！！」

「うんうん。」

「ははは……。」

奈緒は乾いた笑いで返すしかなかった。

4話：入学式 4

明良に口を塞がれ、クラスメイトの3人に『ソツチ系』『男』と紹介されてしまった奈緒。

「二人ともっ！どうして！？酷いよっ……！」

涙目で抗議する奈緒。

「わりーけど。みんなの前で女じゃ困るし。」

そっいつてなだめようとした明良。

「……ソツチ系だなんて……。」

「は？」

は……!？

そっちの話？

重要なのってソツチかよ!？

男なのはどつでもいいのか、お前……。

「ごめんね。奈緒ちゃん。流石にソツチ系は嫌だよね……。」

「って、お前も！そっちの話かよ!?!」

すかさずつつこむ明良。

「どっちもお！」

「だよな。」

奈緒と優司ににらまれた明良。

「……あつそ。」

チツ……

ツッコミ…ボケⅡ1：2か。

「それで……どうして、女じゃ困るの?」

奈緒は明良の言葉の真意を尋ねる。

「だってさ。奈緒ちゃんを独り占めしたいじゃん?」

「……正確には二人だったの。」

「な、なんでっ……。」

奈緒には二人の気持ちがまだ、どうしてもわからなかった。

ただ、唯一の女というだけで、どうしてもそこまで言えるのか……。

「逆に、お前、バレていいの?」

「え?」

「奈緒ちゃん、ここ男子校ってわかってる?」

「う、うん。」

わかってるけど……。

やっぱりバレたら、退学になったりするのかな……?

「じゃー、いいのか?……襲われっぞ。お前。」

「!?!?」

お、おそっ!?!?

こんなわたしを……?

「あ、自覚無しって感じ？ほんとと、困っちゃっね。」

「う……あ……。」

奈緒は言葉が出なかった。

そんなこと、想像したこともなかった。

「心配すんな。守ってやつから。」

「もちろん、俺も。」

「／／／」

奈緒はこの時初めて、二人に会えてよかったと思った。

「そーいえばさ、奈緒ちゃん、寮だよね？」

「一緒？……と優司。」

「ばーか。きまってるだろ。」

「うん。一緒。」

楽しいね、と奈緒。

「部屋どい？」

嬉しそうに尋ねる優司。

「207号室。」

いつの間にか3人は、寮の玄関に来ていた。

「・・・あ。向かいじゃね？」

「えっ!？」

玄関の寮内地図を見て明良が言った。

「あっ!今度こそラッキ!おれは明良の隣」

そういつて優司は自分の部屋を指さした。

「そうなんだあ〜。」

へらへらと奈緒は笑った。

「お前、まじ氣いつけるよ。」

「そーそ。奈緒ちゃんぽけぽけしてるし。」

「ええっ!?!そ、そーなの?・・・そっかあ。」

ポケポケって・・・。

ポケポケってこと?

「また自覚無し。か。」

「そーゆーのが可愛いよね。じゃー明日ね。」

「遅刻すんなよ。」

所々反論なにか言いたいこともあったが、間髪入れずしゃべる二人に何も言えなかった奈緒。

「あ、ばいばあい。」

奈緒は部屋に戻ろうとする二人に、急いで笑顔で手を振った。

こうして、奈緒の記念すべき、男？としての1日目が終わった。

5話：入学テスト 1

入学式の翌日。

恒例の入学テストが行われる日。

朝、寮の廊下で会った明良と優司。

「あ、明良おっはー！」

優司は朝からハイテンションで明良に挨拶をする。

「はよ。・・・奈緒は？」

対照的に明良は眠そうに挨拶をする。

その割に、二言目が『奈緒』であることに優司は少し驚いた。

「んー。寝てるのかな？」

そう言って優司は向かいの奈緒の部屋をノックする。

コンコン

「なおちゃあーん。朝ですけどお。」

シーン

返事はない。

「おい！奈緒！いつまで寝てんだ！」

今度は明良が奈緒をたたき起こすように言った。

シーン

また返事はない。

部屋にはいないな。と寮内を探してみたが、どこにも奈緒の姿が見あたらなかった。

時刻は7時。

登校するには早すぎる。

「ど、どうするよお。明良！奈緒ちゃん、誘拐かな！？」

優司は、奈緒が誘拐されたかも。と、かなり心配してオロオロ。

「・・・入学早々どこ行きやがったんだ。」

明良は、奈緒が勝手にどこかへ行ったとみて、イライラ。

「とりあえずさがそうぜ！」

「つたく！」

結局二人は奈緒を捜すことになった。

二人が探し始めてから10分後。

明良の、「アイツのことだから、自然とたわむれてんだろ。そんなに遠くでは無いはずだ。」という推理が見事に的中して、寮の裏にある池のほとりで奈緒は発見された。

「奈緒ちゃん！」

「あれ？優司くんに明良くん？どーしたのお？」

奈緒はおはよう。と言う調子で、何事もなかったかのようににこにことしていた。

「どーしたじゃねーよ、ばっかっ！なにウロチヨロしてんだ！」

明良はいきなり『バカ。』と言って奈緒を小突いた。

「あたつ。・・・さんぼを・・・。」

奈緒は明良に小突かれた頭を押さえて弱々しく答えた。

「心配したんだからなあ。もう。」

優司は奈緒の頭をなでてさわやかに微笑んだ。

「う、ごめんなさい。」

わたしを心配して捜してくれたんだ……。

奈緒はやっと、自分が二人に心配を掛けていたことに気がついて謝った。

「学園ろくに知らないくせに、迷子になるぞ。」

「うう……。」

「……どっか行く時は、俺たちに言え。いいな？」

初めは奈緒を叱る明良だったが、最終的には奈緒を気遣う。

二人とも、ホントに心配してくれてるんだ……。

奈緒はそう感じたら、嬉しくなって笑った。

「了解しましたっ！」

「とにかく、無事で良かったよ。さあ、寮に戻ろう！」

「わざわざ探しに来てくれてありがとう。」

「・・・なるべく人に会わないようにと思って。」

「早く朝ご飯食べて、ヒマだったから、つい外に出たくなっちゃって・・・。」

「「あ！」」

「えっ？」

奈緒の言葉に反応して、二人は同時に何かに気がついた。

「そつえば、朝食まだだね、俺たち。」

明良も優司も、奈緒がいないことに気がついて、急いで出てきたのだ。

「チツ、俺としたことが・・・。今日はアジの開きだ。」

「まじ？急がなきゃ。」

そう言つて二人は足を速めた。

駆けていってしまうだろう、二人の背中を見届けようと思っていた奈緒だったが、不意に二人が振り向いた。

「えっ・・・？」

二人は奈緒に向けて手を差し出す。

優司は右手。

明良は左手。

「ほら、手えとれよ。」

「奈緒ちゃん、早くっ!」

二人に言われてようやく状況が分かった奈緒は、両手を伸ばして二人の手をとった。

二人の男子に手を取られてエスコート。

・・・なんて甘いものではなかった。

「行くぞ。」

合図は明良の一言。

「ひえ!!?」

奈緒の小さな悲鳴も聞かず、二人は奈緒を抱えて食堂へとかけ出した。

アジの開きが待っているから・・・?

6話：入学テスト 2

明良と優司は無事にアジの開きを食べ、3人で登校した。

「今日はテストだねー。」

奈緒はのほほんと言った。

「そーだねー。……ってか、奈緒ちゃん！『だね』とか言ってた
らばれちゃうって。」

明良は慌てて周りを見渡した。

そばで奈緒の言葉を聞いているような人はいなかった。

「あ、そっか……。」

奈緒はポンと手を打って笑った。

「はぁ……。」

奈緒の様子を見て、明良はためいきをついた。

「うーん。じゃあ、『ぼく』って言ってたら大丈夫かな？」

そーだそーだ。

『ぼく』って言おう。

名案！

奈緒は同意を求めるように明良と優司を見た。

「……………」

二人とも目をそらして黙ったままどこか遠くを見た。

「？」

奈緒は二人の反応が良くわからないままに教室に入った。

「ん〜。終わったあ〜。」

テストがすべて終了し、奈緒は背伸びをした。

「いえーい！奈緒ちゃんどんな感じ？」

優司はのびのびと両手を挙げながら聞いた。

「うーん。まあまあ。」

奈緒はいつも通りの笑顔。

「明良は？」

優司は次に淡々としている明良に聞いた。

「完璧だ。」

優司はそう一言言って勝ち誇ったような不適な笑みを浮かべた。

「……えっ。」

完璧って……！

自信を持って言っちゃうの？

奈緒は明良の顔を不思議そうに見た。

「奈緒、何だその顔。」

明良は奈緒の表情をみて、奈緒のほっぺたを両手で引っ張った。

「い、いたあい！ちゅねりやにやいでっ！」

奈緒は舌足らずに抗議の声を上げた。

「ぶっ！」

明良は思わず吹いて、手を放した。

「……ひ、ひびい……！」

つなつて、顔見て笑うなんて……！

「よしよし、奈緒ちゃん。いたいのいたいの、颯太にとんでけ」
「！」

優司は子供をなだめるような動作をした。

「お、俺かよ！？」

たまたまその辺りにいた颯太がとばっちりを食らった。

「あははっ。」

奈緒はそれを見て笑った。

「ねえねえ、ナオちゃんは、どんな部活に入るの？」

奈緒が笑っていると、涼真がニコニコと話しかけてきた。

「え……、部活……。」

そっか、高校だもんね……。

「そっだな……、見に行く？」

優司が優しく言った。

「良いの?」

「モタモタすんな。行くぞ。」

明良が奈緒の腕をつかんですぐに教室から出て行くこととする。

「あ、ちょっと!・・・颯太くん、涼真くん、政喜くん、ばいばい!」

奈緒は明良に連れて行かれる前にかろうじて3人に挨拶をすることができた。

「さあ、俺は野球部行こう!」

颯太は元気よく言う。

「自分は・・・科学部ですかね。」

政喜は眼鏡をクイツとあげてつぶやいた。

「僕は・・・とりあえず見てこよ。」

涼真は楽しそうにスキップで教室を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1831f/>

宝星学園

2011年1月26日08時35分発行